

やはり俺達の恋愛感情
は間違っている。

まつ壱

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何時も皮肉に考えてしまう八幡。

しかし、雪ノ下・由比ヶ浜・戸塚と人と触れ合うたびに比企谷の心境も変わっていく。

『本物とは……』

? ? ?

いつもと同じメンバーの軽い系の日常ラブコメ小説です！

勢いと私欲120%で書いていますので、ぶっ飛んでいると考えてください。

目次

何時もながら生活。	1
時々見せる顔。	9
気付かない大切さ。	16

何時もながら生活。

この世は、恨み恨まれ生きています。それとは別の意見として「そんな事は無い」というのも出てくるだろうが、それはただの自己暗示ぐらいにしかならない……。まあ、何が言いたいかというと『そのぐらいしかない価値観はクソ喰らえ』だ……。

? ? ?

「何やってんの……、お兄ちゃん?」

ソファに項垂れている俺の真上から小町が不思議そうな顔をして覗き込んでいた。

「いやなあ、少し考え事をしていただけだよ」

「ほんとうかなあ……、由比ヶ浜さんとか雪ノ下さんの事を考えていたんでしょ」

「いやいや、俺は可愛らしい妹の事を考えていたんだよ」

などと、冗談ギリギリのラインで返答した。

「いやあくん、ってそんな訳ないでしょ。考え込むのもいいけどたまには小町にも話してくれてもいいんだよ? あっ! 今の小町的にポイント高い」

つと小町は上機嫌で言い放ち身体を近付けてきた。 …あれつ、小町つてこんなにい子だったけ?!

「お、おう… その時はしつかりと助けてもらうからな」
「任せておいて。 お兄ちゃん！」

と言い小町は少し眠たそうに俺の肩に頭を置いた。 居心地の良さそうな甘い声を漏らし、「おやすみ、お兄ちゃん」つて……………、おいおい！ 寝る時は布団で寝ましようね、風邪ひいてしまふよ。

「小町、寝るなら自分の部屋で……………、もう寝ているかあ」

小町の寝顔を見ながら（ああ、平和だなあ）としみじみと感じる。 この幸せな雰囲気気を崩さないように、なるべく物音と振動を立てないように小町を部屋までお届けしなければ…。

が、持ち方は……………、お姫様抱っこでいいか。

ぐつと小町を持ち上げた。 そして、くるつと持ち直してつと……………。

何とか起こさずにお姫様抱っこまで出来た。 問題はこれからなんだよなあ……………。

小町を抱えてこの後どうするかだ。

解決の策も無く、途方に暮れている俺の目の前で「すぴー すぴー」と気持ち良さそうなお小町の寝顔が目に入ってきた。

その顔を見るたびに攻略の鍵が見つかりそうになる。うむ、もういつそのこと二人ともソファで一緒にソファインでもしようかな？

…それもいいが、やっぱり夜は冷えるからなあ。

いくつもの試行錯誤の結果……、最後の判決を決定した。

? ? ?

……

……

「……お兄ちゃん? これはどうゆう事?」

んっ? ……ああ、考え抜いた結果、一緒にソファで寝ることにしたんだっけ?

うくんっ! とおおきく背伸びをして、小町に昨日の出来事を話すことにした。

「ほら、あの時小町寝てしまっただろ。だから、起こそうと思つたら俺もつられて寝てしまつてだなあ」

…真実だよ、真実。改竄じゃないよ… 真実だよ。

つと在り来りな言い訳をついたが。

「うん…、普通じゃないね」

普通じゃない……、そもそも普通とはなんだ!?

テンパリ過ぎて、思考もおかしくなりだした。まあ、元々おかしいのは認めるけども。

「えつとだなあ。何もなかったぞ」

「まあ、何かあつても無くても小町はお兄ちゃんを責めるつもりは無いよ。途中で寝てしまった小町にも責任はあるかも」

「何か…、ごめんな」

さっきの小町の発言にうるつときてしまった、やっぱり、小町はいい子！ 本当がいい子!!

「両方ともつてことで、おはよう！ お兄ちゃん！」

「ああ、おはよう小町」

そんなこんなで、昨晚の事件？は解決した。俺も小町も無理な体勢で寝ていたせいか、寝違えていて少し痛い目にあつた。…まあ、なんだ、不可抗力とは言え小町と久しぶりに一緒に寝れたとゆうことは良かったことだな。……シスコンじゃ無いよ、…シスコンじゃ。

? ? ?

それから時間が経ち学校終わりの放課後。

もう既に大体の人は帰っており、只今部活に行くか迷っている。

決して行きたくないからとかではない、むしろ行つて残り僅かとなった小説を読み切りたいぐらいだ。

…しかし、現在それよりも大事なことがあつてだなあ。

「八幡……、今日二人でどっか食べに行かない?」

そう……、あの天使よりまさる戸塚に上目遣いされながら誘われている。これは千載一遇のないチャンスと言つても過言ではない。その流れで告つてもいいよな?

「あれ?! 部活じゃないのか」

「うん……、今日は休みだったから……」

うーん! このなんとも言えない感じ……とても好きです。このさりげない会話が未来栄光に続けばいいと本気で思う。

(たまには部活に行かずに別のことをしてもいいかなあ?) つと思ひ、机に手をつきスツと立ち上がる。早めにここを出ないと由比ヶ浜とかに捕まつてしまうから、なるべく急ぎ足で……。

急ぐついでに、ちゃっかり手を繋ごうと頑張つてみた……。さりげない感を出しな

がら精一杯やっている。

たまに、手の甲と甲が当たった時に戸塚が「あつ…」と甘い声を零す。あまりやり過ぎると俺の理性が壊れかけそうなので、やり過ぎ注意だ。

「八幡… 少しいいかな？」

「んっ？ どうした？ 戸塚のお願いならなんでも聞くぞ」

「あのお…、由比ヶ浜さんが…」

…えっ？ 何？ もう戸塚と付き合っている事がバレた？

いやいや、そうではないと自分自身に言い聞かす。今は由比ヶ浜が納得する言い訳を考えなければ…。

スつと由比ヶ浜の方を向き、少々俯き。

「これはだなあ…、由比ヶ浜」

「えっ？ 何が？」

あれ？ あまんなり気にしていない？

少し安心して、目線を由比ヶ浜に向けた。

…ちよつと待ってくれ、由比ヶ浜に向けられている目線がとにかく心に突き刺さるんだが。

「そんな目を向けてどうした……?」

「いやね、その右手がねえ」

由比ヶ浜は妙に手の事を気にしている。何か問題でもあるかと思ひ、(ふっと)手の方を見る……。

『あつ……』

そこには、戸塚と一緒に恋人繋ぎをしている自分の手が見えた……。

「八幡……、恥ずかしいよ……」

戸塚は頬を赤くして、由比ヶ浜はえげつない程の目力で俺に訴えかけてくる。

まあ、これは事故だから…… 仕方がないよな。

一瞬意識がぶつ飛びそうになりながらも必死に恋人繋ぎに耐える、ここで、恋人繋ぎを解消して今までの経路話せば由比ヶ浜も許してくれるはずだが、そんな事したらこの比企谷…… 一生の悔いが残ってしまう。

「行くぞ、戸塚!」

「えっ! 八幡、このまま?」

「ああ」と言つて、由比ヶ浜から逃げるように教室を後にした。恋人繋ぎの件はそのままで行こうと思う。……今外すと減速してしまい、追いつかれてしまうかもしれんな。

別に繋いだままでいたいとかそんな訳……、あるかも。

時々見せる顔。

「ハアハア…」何とか逃げることを口実として戸塚とファーストフード店まで手を繋いでいくことが出来た。あつ、手を繋ぐではなくて逃げる為だな、うん…。

つと自分の思い通りに耽っていると、戸塚に服をぎゅつと握られた。

「どうした？」戸塚

「…強引過ぎだよ、もお」

あのお、俺怒られているんだよな？　なんでか、戸塚に怒られると心の底から嬉しさが湧き出る。…不思議だ。

「ねえ！　聞いてる八幡？」

「ああ、ちゃんと聞いている」

「ほんとうに？」

「う、うん」と頷くと、戸塚はニッコリと微笑み、「じゃあ、行こうかな」と言いファーストフード店の中へ入っていった。

俺もあとを追うように自動ドアを通る。

カウンターの所では、テンションが上がっている戸塚がメニューから何を食べるかを

選んでいた。俺も一緒になって考えることにしようかな。

さりげなく戸塚の後につく、そして、後ろから覆いかぶさるようにメニューに手を伸ばす。

「なあ、戸塚。もう決めたか？」

「八幡は？」

「決めてないけど……」

「じゃあ、早く決めて…… 八幡と同じものが食べたいから……」

これで何回目だろうか？ ここまで戸塚にドキッとしてしまうのは。 た、ただ戸塚は俺と同じものが食べたいと言っているだけじゃないか。 その他に深い理由でもある訳でないだし……

何とか危なかつしいこの気持ちを落ち着ける。 もし、何があつてからでは遅いしな……。

「うくん、じゃあ、この照り焼き香るテリビートのセットで！」

「ぼつ僕も同じもので」

「テリビートセット二個でお会計1280円になります」

店員から言われた通り、指定された金額を支払う。 隣では640円を握り締めてい

た戸塚が驚き困っている。

「えっ？ 半分は僕が出すんじゃない？」

「今日は戸塚に色々とお馳走になったんだし。奢らせてくれないか？」

「僕、何かしたかなあ……」

「ああ」と戸塚を戸塚を安心させるように頷く。ご馳走になったとは言葉の綾なのは黙っておくことにした。

？ ？ ？

「ううううん！ 美味しいよ八幡！」

「そうだな、この甘辛いタレがパンと肉に染み込んでとても美味しいな」

出来たばかりのファーストフード店だったから不安もあったが、この店は当たりのようだ。

「ごめんね…、奢ってもらって…」

「気にするな、俺ならタダ飯なら喜んでもらおうぞ」

「八幡つたらあ……」

戸塚もどうやら理解してくれて、さつきまで640円をどうやって受け取って貰うかを悩んでいたぐらいだ。…ってまだ持っているんじゃないかちよつと不安かも。

「八幡、スマホ鳴っているよ」

戸塚に言われポケットからスマホを取り出す。ホームボタンを押すと新着メールが二件もきていた。

…えつと、何だ何だ。

メールの画面を開くと、差出人は雪ノ下からだったので少し怖いが勇気を振り絞って（ポチッ）とメールをタップする。

『少し聞きたい事があるのだけどこいかしら… 由比ヶ浜さんがさつきから「ヒッキー、ヒッキー」と言っているけど、何かあったの？ ？・ω・？ニヤー』

これが、一つ目で。

『最後のはただ手が滑っただけだから。あまり気にしないで。』

二つ目だ……。

…？・ω・？ニヤーとは？

あの雪ノ下がミスとは珍しい事もあるんだなと感心する。 いやいや、そうではなく

…、多分あの時のだよなあ。

教室でのことを思い出す。 しかし、男子同士で恋人繋ぎしたぐらいで…、あれっ!?

男同士でつて異常ではないか!?

今更ながら、おかしいことに気がつく。そんな性癖では無いと俺自身でも分かっているが、色々引つかかる。

まあ、急いでいたからな…、うん。結局は自己完結してしまった。

戸塚はとゆうと、さつきからスマホを見ながら「うゝむ…」と唸っている、比企谷を心配していた。

「さつきから浮かない顔をしているけど、大丈夫?」

「…あつ、何でもないから大丈夫だ。」

(本当かなあ…)と疑っているのか、じつと目で戸塚が見つめてくる。

「なあ、戸塚」

「んっ? どうしたの八幡」

「顔… タレが付いているぞ」

ちよつと照れながら戸塚は顔に付いたタレを拭き取る。「これで…、大丈夫?」と聞いてきたものだから、恥ずかしさのあまり自分の顔を伏せた。

「ねえ、八幡?」

「ああ、安心しろ。もう取れているから」

「良かった」

それは、ニツコリとした満面の笑みだった。 …もうこのまま、戸塚をお持ち帰りしたくなつたのは内緒にしよう。

そして、それから時が経ち。 食べ終えた紙くずを捨て、残りのジュースを勢いよく喉に通す。 むせ返りそうになったが、何とか止める事に成功した。

? ? ?

「今日はありがとうね…、とても楽しかったよ」

「そうか、まあ、俺も楽しかったのは言うまでもないがな」

「ふふ、八幡らしい」

嬉しそうな戸塚を見つめ、今日の事を振り返る。 色んな問題があつたが俺が出来ることはやったと思う。 …どうしようもないのが一件あつたが。

由比ヶ浜には明日にでも弁解して、今日のところは潔く帰ることにした。

案外戸塚の家とファーストフード店が近く。 戸塚とは直ぐのお別れとなり、少し悲しい。

「それじゃあね… 八幡!」

「それじゃ。 戸塚」

そして、俺は一人で歩き出した。
『明日の恐怖』に向かって……。

気付かない大切さ。

人間誰でも逃げたい時は存在している。しかし、それから逃げていいのかわ。それは、状況によるが『否』だ。そお、いま絶賛逃げたいが、必死に耐えているところ……。

由比ヶ浜から正座させられ。頭を地面に付け完全土下座状態になっている。

「ねえ……、ヒツキー？」

「は、はい。何でしょう」

「あの後、何かあった……？」

「戸塚と一緒に新しく出来たファーストフード店に食べに行っていました」

「そう……」と言い、グツと顔を近付けて「ふふつ」と若干笑顔になつていくのが分かつて

由比ヶ浜に恐怖を感じる。……てか、雪ノ下は助けてくれないのか？

背後では、椅子に座り片手にコーヒーマウ片方には本を持ち、優雅にコーヒを啜っている雪ノ下が見える。

「ゆきのん？ ヒツキーの刑……、何がいいかな？」

……えっ？ 物騒な話しているけど俺大丈夫かな？

「そうねえ…… こう言うのはどうかしら」

雪ノ下はクイクイッと由比ヶ浜に手招きをして、耳打ちを شدした。

由比ヶ浜が「ああ、それいいね」と嬉しそうにしているが、雪ノ下が何を吹き込んでいたか本当に心配になる。　：流石に拷問とかではないよな??

「じゃあ、決まったから決断の時だよ」

「ああ」

由比ヶ浜はその場にある酸素を思いっきり吸い込み、俺に向かって語る。

「今度、ヒツキーの家でお泊まり!!!」

「は!?!」

あまりに意外過ぎる刑になってしまい、結構の動揺を隠せないで口が半開きになる。

：それに、雪ノ下が考えそうに無い事をなので謎は深まるばかりだ。

「いいよね、ヒツキー」

「なあ、聞かせてくれ由比ヶ浜。その考えって本当に雪ノ下が考えたのか?」

「そうだけど…、ねえ、ゆきのん」

俺と由比ヶ浜の視線が雪ノ下に集まる。雪ノ下とゆうと顔を紅くさせポツリと「たまには、部活メンバーで集まるのもいいかな」って今気がついたのだが、雪ノ下は多分俺の家に居る猫と遊びたいだけなのでは……。

「決定ね、ヒツキー」

「ちよつと待つてくれ。小町に聞いてみるから」

「う、うん。 そうだね」

由比ヶ浜もついつい勢いでやり過ぎた事に気づき、申し訳なく反省したのか少し俺から距離をとる。

俺はバックからスマホを取り出し、小町に向けてメールを送る。

『すまん小町。 今度、由比ヶ浜と雪ノ下が泊まりに来るけどいいか?』

一応小町にメールは送ったが、泊まれるかは小町次第なんだよなあ…。 俺的には

どっちでもいいんだが。

…期待しているとかではないよ、仕方がないのだ…。 うん。

それから数分が経過し。

スマホが唐突に鳴る。 まあ、メールだからな。

ポチポチつと小町から送られたメールを確認する。

『任せておいてお兄ちゃん! やつとだね、やつとだね小町は嬉しいよお。 あつ、私も

その日友達の家泊まりに行くから二人には宜しくね!』

…今度つて言ったんだけどな。

小町の事だから少し不安が残るけど、メールも貰ったし由比ヶ浜と雪ノ下に報告する

ことにした。

「小町は賛成だとき」

「やったねゆきのん！」

「わ、私？」

「うん！」と由比ヶ浜は楽しそうに笑顔になっている。雪ノ下は…… 何やら手がソ

ワソワしているけど。そんなに猫が触りたいのか？

「じゃあ、約束だよ」

「ああ、約束は守るさ」

「本当かしら」

「雪ノ下から見て俺がそんなに嘘つきに見えるのか」

「比企谷君だからね」

これで、昨晚の出来事は一件落ち着いた。由比ヶ浜も俺が思っている程ではなくて、

多少は助かったのもあるが……。しかし、お泊まり会となると色々と準備もあるし。

なにより、まだ『今度やる』位しか決まっておらず、ハッキリとした事もわからない。

その事を議題として由比ヶ浜と雪ノ下に問いかけてみる。

「いつ泊まるかの良い案内ないか？」

「うん……。何日がいいかしら」

「私はいつでもオツケー」

由比ヶ浜は親指を俺の目の前に突き出してアピールをしている。多分俺の意見は聞いてくれそうにないので、皆などと合わせる方向性で……。

「比企谷君、この日とかどうかしら？」

「んっ？」雪ノ下から提示された日程は次の休みの土曜日かあ。まあ、やっぱ金・土の

どちらかが安定しているし、雪ノ下が決めた日程で決定かな。

「うん、その日ならいいな」

「そお？ なら良かった」

「これで、決定だね」

「ああ」と由比ヶ浜に笑顔でこたえる。俺に巻きついていた拘束が解けていくような感覚に陥ってしまう。…結構きつかったけど全てが決まったな。

(うくん！) 身体中を使った背伸びをする。凝つてもいたがそれ以上の気持ち良さがまた、たまらないので癖になってしまっそうだ。

? ? ?

俺自身……、これまでに無い程明日への勇気がある事になるとは思ってた。なかった。

現在、お泊まり会の一日前。

…まあ、金曜日なんだが。

「はあ……」

緊張か期待からかため息が漏れる。

「俺なりに頑張ってみせるさ」

何も無い空間での独り言だが、これを言わないとこれからある『物語』についていける気がしない。

それで、小町はと言うと。今日唐突に明日の事情を話したら急にスマホを取り出し何かを始め「明日は友達の家に行くから、由比ヶ浜さんと雪ノ下さんに宜しくね」と言い、自分の部屋に戻って行った。…スマホを取り出した時に友達に泊まっついていいか聞いたんだろう。

泊り会が終わった後、小町が好きな物でも買おうかと思ひ。今は明日に備え寝ることにした。